
彼と彼女の思惑

七崎 雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼と彼女の思惑

【Nコード】

N9653X

【作者名】

七崎 雨

【あらすじ】

割とマイペースな葵と、器用貧乏な繭子。お隣の家に住んでいた繭子が、遠くの街に引っ越すことになった。葵は、繭子は、いったい何を考えているんだろうか。なんとなく微妙な距離感の2人と、水面下でやきもきしたり空回ったりする女の子を見て、にやりとするお話。かな？

彼の思惑 1

繭子は、かわいらしくめそめそ泣いたりしない女だった。いつも気丈だったわけではないが、いつでも自分の中に冷静な部分を持って過ごしているように見えた。小学校の卒業式も、友人の引越す時も、笑ったり悲しんだりと決して無感情そうには見えなかったが、周りの女子に交じって抱き合って泣くことはしなかった。思い返してみると近所のいじめっ子に殴られた時も、冷静に『痛いんだけど』とか言つて、逆にいじめっ子たちをビビらせていたような気がする。

「あたし、引越すことになったから」

繭子にそう告げられたのはもう卒業も間近に迫った、中3の日のことだった。こちら辺のやつらは、大体が隣町にある公立高校へ行き、あまり成績の思わしくない人は、そのまた隣町にある公立か、裕福ならば私立に行ったりもする。そういうわけで、俺は今日この瞬間まで当然繭子も俺と同じ隣町の高校へ進学するのだろうと思っていた。思っていた、というよりは、それは俺の中では決定事項だったのだ。

繭子が、引越す。つまり俺たちの腐れ縁も、終わるということか。予想すらしていなかった言葉に俺は一瞬驚いて、思わず歩みを止めてしまった。隣を歩いてきた繭子が、いきなり立ち止った俺に珍しいものを見るような視線を向けてくる。

「引越すって、お前高校は？」

生まれたときからの幼馴染が引越すというのに、俺はそんなありきたりなことを聞いてしまった。ちょっと薄情だろうか。しかしとっさにそう思ってしまったのだから仕方ない。

「ちゃんと受けてる。引越すことは春から薄々決まってたし。レベ儿的にはここの高校とおんなじくらいだし、受験票書くころにはもちろん決まってたけど」

また2人並んで歩きながら、さくさくと雪を踏む。

俺たちは生まれたときからお隣同士、という昔からよくあるマンガみたいな関係だったが、言葉から連想されるほど密着した仲ではなかった。昔は一緒に学校へ行ったり公園で遊んだりもしたものだが、小学校高学年くらいになるとお互い同性の友達と遊ぶ方が多くなり、中学に入って部活動に勤しむようになる、学校以外で顔を合わせることも珍しくなっていた。まあ偶然会った帰り道では普通に一緒に帰ったり、時々母親に頼まれて届け物に行ったりもしていたし、決して仲が良くないわけではなかったが。

「どこに引越すんだ？」

繭子はここから電車で5時間はかかる、ここよりずっと栄えているであろう県の名前を口にして、父の仕事の都合だから、と言った。そっか、残念だな、と俺が答えたところで、家が見えてきた。

「卒業式には出るんだろ？」

「うん。式の次の日行くことになってる。多分みんなで挨拶に行くと思うからよろしくね」

そのままなんだかあっけなく別れて、家に入った。何故今まで引越すことを黙っていたのか気になったが、そのことについて繭子が全く補足しないので、なんとなく聞きにくかった。繭子はきつと、俺がそのことについて不思議に思っていることは、気づいている。その上で口にしなかったのだ。何故かはわからないが。

母親に繭子が引越すことを知っていたかと聞くと、あんた知らなかったの、と驚かれた。

「長いお付き合いだったのに、残念ねえ。寂しくなるわ。でも明日は家で倉田さんとお茶することになってるのよ。今のうちにたくさんしゃべっとかないとね」

うちの母親と繭子の母さんは、これまた仲がいい。話し好き同士、気が合うのだろう。

制服を脱ぎ、ベッドに寝転んでぼうつと天井を見上げた。もうすぐ繭子がお隣のお嬢さんではなくなるのか。なんとなく感慨深い

ものがある。隣の家は、そのまま誰かが住むことになるのだろうか。
倉田家ではない人たちが、隣の家に住む。それはなんだか、とても不自然なことに思えた。

彼の思惑 2

「アオイ、お前との長い3年間も、今日で終わりだなあ！泣くな相棒よっ！」

「あー、はいはい」

卒業式当日、クラスはいつもより浮足立っていた。黒板には女子が書いたのだろうか、『卒業おめでとう！みんな大好き！』と、丸っこい文字が綺麗に縁どられていた。吹奏楽部のリハーサルが、少しだけ漏れてくる。

「なんだよつれねえな！もうちょっとなんかあんだろー！」

「うるせーな、何もねえよ。どうせ高校も一緒だろ」

「中学のオレと高校のオレは違うの！」

馬鹿みたいな声を出して、美鳥が机をバシバシ叩いた。この日野美鳥とは中学で知り合ったのだが、いつも馬鹿みたいなことを馬鹿丸出しでやっている、本当に馬鹿な奴だった。それでいて成績はかなり良く、ついでにクラスのムードメーカーでもあった。

俺の中学3年間は、美鳥に巻き込まれる形で大変騒がしいものとなってしまったが、自分とは正反対な美鳥と一緒にいるのは思いのほか楽で、楽しいものだった。……調子に乗るので、本人には絶対言わないが。

俺の前の席に後ろ向きで座っていた美鳥は、なんだよつれねえなあ、とわざとらしく拗ねて、それからふと思い出したように俺を見上げた。

「そついやーさ、繭子ちゃん引越すんだろ、寂しくなるよなー」

「は？お前知ってたのか？」

意外な人物から意外なことを聞いて、俺は素っ頓狂な声をあげてしまった。

「知ってるも何も。昨日朱里が一晩中泣いて泣いて泣いて、お兄ちゃん慰めるの大変だったんだからー。まあ泣いてる朱里はかわいか

「ただけだよ」

そういうことか。美鳥には双子の妹がいて、繭子と同じクラスだった。妹の朱里の方は美鳥ほど勉強は得意ではなかったし、運動は苦手で、というかはつきりいって鈍くさかったが、おっとりとした優しい女の子で、俺も何度か話したことがあった。繭子と日野さんは同じクラスで、よく一緒にいるところを見かけた。

「朱里も繭子ちゃんにべったりだったからなあ。お前だって幼馴染なんだから、寂しいよなあ、そりゃあ」

美鳥が珍しくしんみりと言ったので、俺も思わずそうだな、なんて言ってしまった。

事実として考えると、きっと寂しいことなんだろうと理解はできる。が、正直実感がなくて寂しいとは思えなかった。いなくなるのか、なんか変な感じだな。多分それが俺の感じている本当のところだろう。

「美鳥ー、ちょっとシャッター押してくんねえ？」

隣のクラスの奴らが、廊下から顔を出して大声で言った。

「おいおい、この美鳥ちゃんを撮らずして何を撮るって言うんだよ！オレも混ぜてやるよ！」

「うつせー、おまえはいらねーよ！」

なんだと、と美鳥はにやにやしながら廊下へ駆けていく。廊下から楽しそうな笑い声が響いた。

「葵、俺らも撮ろーぜ。おい美鳥ー、それ終わったら次こっちのシャッター押せよー！」

「バカっ！もうお前らなんて知らないからっ！オレ泣いちゃうからっ！」

美鳥が言って、ぎゃはは、とみんなが笑った。俺も笑った。

ただ、さっきのなんだかよくわからない変な消失感みたいなものが、しこりのように心に引っかかっていた。

繭子はかわいらしくめそ泣いたりはしなかったが、同じくらい感情をあらわにして怒ったり、焦ったり、落ち込んだりしたところを見たことがなかった。俺もどちらかというと表情豊かとは言い難いタイプだったので、小さいころの俺たちはさぞかし可愛くない子供だっただろう。

「先輩、卒業おめでとうございます！先輩がいなくなるなんて寂しいです！」

「わたしたちもすぐ同じ高校行くんで、忘れないでくださいね！」
式が終わった後、俺は陸上部の後輩に写真をせがまれていた。小学校へ入って、中学を卒業して、こうしてみると、俺や繭子のように表情が豊かでない人種の方が、むしろ少数派なのだということが気づかされた。学校の奴らは、みんなくるくる表情が動いて、たくさんしゃべる。特に女子はそれが顕著で、何かあると笑ったり泣いたり、怒ったりと、忙しく表情を変えていた。

「先輩、一緒に写真撮ってください。美鳥先輩、シャッターお願いします！」

「え！？なにそれオレはいいの？オレ泣いちゃうよ！？」

俺と同じく陸上部の美鳥が、朝と同じようなやり取りをして笑われていた。 やっぱり、忙しないのに男女は関係ないのかもしれない。

「美鳥せんぱーい、私たちと撮ってくださいーい！」

「おおー！かわいい後輩よ！今行くよーう！」

こうしてみると、俺の周りって案外賑やかだったんだな。

きつとあと何年もすれば、この3年間も思い出したくないほど青臭くって、でも笑えてしまうものになるんだろう。

俺は馬鹿みたいに笑う美鳥の顔を見て、そんなことを思った。

彼の思惑 3

夕陽の沈むころ、俺はいつもの帰り道を歩いていた。3年間通った道を制服で歩くのは、今日が最後になるだろうか。ちょっとセンチメンタルな気分になった。

ふと足を止め、家までの最短経路をそれて、わき道へ入ってみた。部活帰りにはよく、この先の小さな商店街でコロッケや何かを買って、公園で食べてから家に帰ったりしていた。家までは結構距離があるんで腹が持たなかったというのもあるし、肉屋のコロッケと冬だけやっている肉まん屋の肉まんがうまかったので、つい買い食いしてしまうのだ。

高校は逆方向になるので、ここで買い食いする機会もきつと減るだろう。そして、俺ではない誰かが、ここで買い食いをして家に帰って行くのだろうと思った。

コロッケと肉まんどちらにするか迷って、最後だから両方買った。紙袋から温かさが伝わってきて、冷たい掌を温めてくれた。

公園に行くのは久しぶりだった。そういえば、部活を引退してからは初めてかもしれない。俺が公園へ行っていたのは、食べながら歩くのは行儀が悪いからとかそんなお上品な理由ではなくて、ただ単に部活で走って疲れていたもので、少しの休憩の意味を込めてのものだった。寂れた公園で、木に覆われているので、気をつけて見ないとそこにあることすら気づけないような場所だ。いつも部活帰りで時間が時間だから人がいるのを見たことがなかったが、俺はその公園を結構気に入っていた。小さなベンチに座って空を見上げると、たくさんの木々に包み込まれたような星空が、とても綺麗に見えるのだ。

公園に着いて、俺は驚いた。いつもは誰もいないはずのそこに、人が座って空を見上げていた。そしてそれは繭子だった。

「繭子」

俺が声をかけると繭子は振り向いて、少しだけ目を見張った。

「葵？何でこんなところにいるの？」

「それは俺が聞きたいぐらいなんだけど……。隣いいか？」

どうぞ、と繭子はちよつと端へ寄って、ベンチに薄らと積もっていた雪を払った。今は雪も止んでいるので最初から積っていたのだらう。

「まさか繭子もここを知ってるとはな」

「それはこっちのセリフ。かなりの穴場だと思ってただけだなあ」

繭子は少しだけ笑って、空を見上げた。

「冬は夏より星が綺麗ね」

俺もつられて空を見上げた。木々の上に積もった雪が、夏とはまた違って星空を幻想的に見せていた。そういえば、冬はあまりここに来たことがなかったかもしれない。冬の練習は夏ほどきつくないし、やっぱり寒いので、なるべく早く家に帰りたと思っていたからだろうか。

「今日ね」

繭子そのままこっちを見ずに言った。

「朱里がすごい目腫らしてきたの。しょうがないから一緒に保健室行って、冷やしてもらったら大分良くなったんだけど」

「ああ、美鳥が言ってた。昨日は泣いて大変だったらしいぞ」

「ふふ、日野君も大変ね。しかもそのあと後輩の子に告白されて、あの子また焦っちゃって、『私は繭子ちゃんのが大好きだからお付き合いはできません』とか言って、誤解されて半泣きになって、もう最後までやらかしてくれたわ」

「ああ……かなり想像できるな」

でしょ、と繭子は笑って、でもその顔はやっぱり少し寂しそうに見えた。白い息を吐いて、繭子は視線を下げると、しっかりと俺の顔を見た。

「あんたとも付き合い長かったけど……。結構楽しかったわ。特に小

学校の帰り道であんたが側溝にはまったときとか、上から降ってきたバケツの水で身体半分だけ水浸しになったときとか……」

「おいまて、お前だつて転んで田んぼに落つこちておたまじゃくし飲み込みそうになったり、ボール追いかけて土手転げ落ちたりしてただろ！」

「あのときの葵、ものすごい顔して走つてくるから面白かつたわ」

「当たり前だろ！なのにお前ときたら『いたたた……ぶ、葵そのかおもしろいよ』とか言いやがるし！」

「自分だつてドッチボールで顔面直撃して脳震盪で倒れたとき、心配してたあたしに目覚め早々『お前、アホ毛立ってるぞ』とか言ってきたじゃない！」

「それならお前だつて……！」

しばらくやいやいと言いつつしていると、忘れていた、むしろ忘れかけたような珍事件をたくさん思い出してしまつて、おかしくなつて笑つた。

ひとしきり笑つたあと、繭子は静かに立ち上がった。

「多分大学は西町のとこ受けると思うから、縁があつたらまたそのときにでもよろしく」

西町にある大学もまた、ここらの結構勉強が得意な奴ら、つまり美鳥や、自分で言うのもなんだが俺なんかの目指す大学だつた。

俺は大学生になつた自分を想像した。美鳥がいて、きつと美鳥に助けられながら入つた日野さんがいて、繭子がいて。今とあまり変わらない日常が、きつとそこにはある。

「あたし今日買い物頼まれてるから、そろそろ行くわ。葵も風邪引かないうちに帰りなさいよ？」

繭子はきゅつとマフラーを結びなおすと、鞆を手に立ち上がった。「どこのスーパー行くんだ？もう暗いし、送つてくよ」

俺も立ち上がると、ズボンをほろつて言つた。どうせ家は隣なのだ。うちは結構放任だし、今更多少遅くなつても文句は言われない

だろう。むしろ、ここで一人で帰った方が『女の子一人送って来れない甲斐性無しに育てた覚えはない！』とどやされるに違いない。「まだ早いし、他にも寄りたところあるから大丈夫。遅くなったらお母さんも迎えに来てくれると思うし」

「寄り道ぐらい別にいい。冬は暗くなるの早いんだから、あんまり一人でうるちよろしくない方がいいぞ」

今だって十分暗いのだ。親切に俺がそういうと、繭子は目線をちよっとだけ下げた。

「本当に平気よ。すぐ帰るから。あんたは黙ってお家に帰って、その取れちゃったボタンの跡でも眺めてなさい」

繭子の視線を追うと、姿を消してしまった第二ボタンのあったところにたどり着いた。繭子は面白そうににやにや笑っている。こんにやろう……。

「おい」

「おモテになる葵君なんかに送ってもらっちゃったら、女子たちに恨まれちゃうものね。それじゃあまた明日」

からかうようにそう言うと、ひらひら手を振って俺に背を向けた。それはそれは、流れるような美しい一連の動作だった。肩につくかつかないくらいに伸びたまっすぐな黒髪が、さらりと音もなく揺れた。スカートは3年の女子にしては長めの、膝よりほんの少し上の長さだった。

繭子は他の女子みたいにスカートを切ったり、こっそり髪を染めたりしないし、噂話よりも本が好きで、どちらとかという少し古風な少女だった。噂や恋の話が大好きな女子たちに上手く馴染めず小学校の頃はいろいろ苦労したようだが、なんだかんだで人の良い彼女は、今は割と上手くやっているように見える。

コートの上から巻かれたマフラーの少し上に、空気にされされて赤くなつた耳が見えた。きつと正面を向いたら、むき出しの鼻も頬も、同じ色に染まっているだろう。

「おい、待てよ」

「もう、心配性ね、平気だつてば。じゃあね」

振り向いて笑った鼻も、頬も、やっぱり赤かった。もう一度ひらひらと手を振ると、繭子はさっきと同じように、さくさくと雪を踏んだ。

そしてその仕草もまた、目を逸らすのがためられるほど、洗練されていて、流麗であったのだ。

「繭子」

俺は繭子よりずっと身長が高い。よって、俺が繭子に追いつくのはいともたやすい話だった。さつき下ろされたばかりの左腕をつかむと、繭子はびくつと身体を震わせた。

「あんたもしつこいわねえ。だから、大丈夫だつて……」

「繭子、ちよつとこつち向け」

繭子は、もう一度小さく肩を揺らしたが、もう一度繭子、と呼ぶと、しぶしぶといった、実にかわいらしくない動作で、背を向けたままにこちらを向いた。

「……………」

「……………」

繭子が、かわいらしくめそめそと泣いていた。

「……………え？」

俺はあまりに驚いて、腕を放してしまった。

繭子が、かわいらしくめそめそと泣いている。繭子が泣くところを見たのはもしかしたら初めてかもしれない。唇はきゅつと引きしめられていて、眉は顰められていたが、目線は決して俺を見ずに斜め下を見ていた。その目から、大粒の涙がぼろぼろと落ちて、雪に小さな穴を穿っていた。

彼の思惑 4

「せめて、なんか言いなさいよ」

繭子はへの字口のまま言った。

繭子は普段、めつたに嘘をつかない。大体的場合において、彼女の言うことは真実であり、本音である。

繭子はいつも周りを見て、気を使いながら行動するやつだったが、それは自分の感情を押し殺しているわけではないというのは、見ていればわかった。ただ昔から、時々繭子の言葉や動作がまるで流れるくらい美しく見えることがあった。そんな時は必ず、何かをこまかそうとしている時だということに気がついたのは、小学校も終わりに近づいてからのことだったような気がする。

「いや、まさか泣いてるとは思わなくて……なんか、珍しいもの見ちまったな」

「何その反応。これはあれよ、昨日読んだ感動的超大作の結末をちよつと……」

「嘘だな」

俺のカンがそう告げている。というか、誰でもわかるだろ。

繭子は声も上げず、涙を拭いもせず、きゅつと眉を寄せてひたすら涙をこぼしていた。声は出さなくせにあんまりぼろぼろ泣くので、ちよつとおかしくなってしまうて、俺は子供に話しかけるように繭子に声をかける。

「まーゆー」

「……………」

ぐつと睨まれた。噛んだ唇が赤くなっている。

「つたく、何ひねてるんだか。」

「どうしたー？ほら、こわくないから言うてごらーん」

俺は少し首を傾げて、おどけたように……いや、むしろなんか変態っぽい言い方だな……。わざとだけど。一応言うておくと、俺は

別に繭子に劣情を抱いたことはないぞ。

「この、ばか、何言ってるのよ」

「え、なに照れてんだよ。お前変わったやつだな」

珍しく言い淀んだ繭子を見て笑うと、繭子はぎゅっと眉を寄せる。それから泣いてる女の子見て笑うなんて、あんたも変わった趣味だわ、とそっけなく言った。泣いているくせに流暢にしゃべるやつだ。「ほらほら、いい子だから言ってるらん。お兄さんが聞いてあげよう。ん？」

顔を覗き込むと、ぎゃ、と言ってまた目を逸らした。

「まーゆ、まゆちゃん。まったく、なーに泣いてんだよ」

そういえば小さい頃は、まゆ、あおくん、なんてかわいらしい呼び方をしていた。いつの間にか、繭子、葵、なんてお互い大人ぶって呼んでいたが。

あおくん、と今の繭子が俺を呼ぶところを想像する。 結構面

白い。

「ちょ、ちょっと、寂しくなったのよ。いろいろ思い出して、寂しくなったの。高校に行ったら、朱里もいないし、隣にあんたもいない。それで、あんたたちは、あたしのいない高校で、彼女作ったりしながら、面白おかしく過ごすのかって、思ったら、ちょ、ちょっと、さみしくなったの。それだけ。こ、子供みただけど、仕方ないじゃない」

そろそろ少しだけしゃくりあげながら、それでも泣いているにしては落ち着いた様子で繭子は言った。目線はまた斜め下に逸らしてしまっただが、その手がとても落ち着かなそうにスカートを握りしめ、そんな自分に気づいてはっと手を離すということを繰り返していた。ちら、とこちらを見たときには繭子の顔を見ていたので、恐らくバシていないと思っっているだろうが、残念だな。

「そっか、俺に会えなくなるのがそんなに寂しいか、ははは。お前もちよつとはかわいらしいところあったんだな」

「そりゃあ、10年以上お隣だったんだし、当たり前でしょ」

落ち着き払って言う、その手は再びさまよっていた。なんだが、甘え慣れてない小動物を見ているようだった。

「うん、よしよし。泣け泣け、もっと泣け」

繭子の正面に回り込んで、髪を両手でわしゃわしゃと撫でてやると、指に触れた頬は思いのほか熱かった。繭子をはじめ『わ、髪！ぐしゃぐしゃになる！』と逃げ出そうともがいていたが、そうすると俺が腕をつかんでさらに引っ張るので、観念したようだ。

「はは、ゆき、ぬくいな」

繭子の頬は火照っていて、俺の冷え切った指先には心地よかった。うつむいた繭子の睫はつややかに影を落としていて、ああ、女の子だなと思った。さっきよりも大粒の涙をこぼしながら時々しゃくりあげる姿は、いつものしっかりした姿とは程遠い、ただの小さな女の子に見えた。そしてそう思ったことに、自分自身驚いた。

彼の思惑 5

ひとしきり泣いたあと、2人ですっかり冷え切った肉まんとコロッケを食べながら、一緒に帰った。面白いのでお使いはいいのかと聞こうかと思つたが、今日の繭子にそんな事を聞いたら逃げ出してしまいそうなので、やめておいてあげた。うん、俺って優しいな。

けれど俺の隣を歩く繭子はなんだかおかしく、いつもの倍くらいいろいろなことをずっと一人でしゃべっていた。ふらふらと車道に出そうになったり電信柱にぶつかりそうになったりとても危なっかしかつたので、思わず手首をつかむと、ぎゃ、とまた小さく叫んだ。そしてそこから家につくまで、一言もしゃべらなかつた。

「葵君、いままでありがとねー。こんなカツコイイ子がお隣さんでおばさん嬉しかったわあ。高校でもがんばってね」

「はい、おばさんもお元気で」

次の日、朝早くに繭子たちは引越していった。繭子はすっかりいつも通りの様子に戻って、家の父さんと母さんに礼儀正しく頭を下げていた。

「達者にやんなさい。たまには連絡するわ」

俺にはそんな婆さんみたいなことを言つて、ものすごく綺麗に笑つて見せた。

昨日のことを素直に口に出して『昨日は迷惑かけたわね』なんて言うのと、まるで何もなかつたような素振りで別れるのと、どちらがいいか一生懸命考えて、練習してきたのだろうか。けれどいつもなら確実に前者を選択する繭子が後者を選んだことが、彼女の動揺ぶりを表してちよつと笑ってしまった。

去つていく車を見ながら、俺は自然と微笑んだ。もう1月もすれば、高校が始まる。きっと繭子は、何度も何度も考えて、迷い尽く

してから連絡をしてくるのだろう。

その前に、俺から連絡をしてやらないとな。優しい俺はその時の彼女を想像して、そしてもう一度笑った。

彼の思惑 5 (後書き)

これで葵視点のお話はとりあえずおしまいです。次は同じ話での繭子視点になります。こちらとは多少違う感じになるかと思いますが、そちらも含めて1つの話になっているので読んでいただけると嬉しいです。

ここまで読んでくださってありがとうございます！

彼女の思惑 1

中途半端に頭の良い人間は、日常生活を送る上で、大変損をすると思う。そう思ったのは、中学に入ったばかりの頃だっただろうか。暖かい、というには勢いを増してきた春の日差しを浴びながら、教室の窓際、一番後ろという誰もがうらやむ席に座り、3年生になった私はぼんやりとしていた。教壇では先生が私たちに背を向け、ひたすら黒板に文字を書いている。

やたらと板書の多い授業に疲れ、ふと窓の外を見た。桜の木が葉を青々と茂らせる中、体育をしている生徒たちが目に入る。もうすぐ行われる体育祭での、クラス対抗リレーの練習のようだ。体育は2クラス合同授業なので、多分あれば3組と4組だろう。クラスで仲の良い朱里あかりの兄である、日野美鳥君がアンカーの位置に立っていた。そして、そのアンカーにバトンを運んでいるのが、まさしく私の幼馴染である椎名葵だった。

「お兄ちゃんと椎名君、タイムがあんまり変わらないらしくてね、じゃんけんで勝った方がアンカーって決めたんだった。お兄ちゃん負けちゃったらしいんだけど、アンカーがいいつて駄々こねて、椎名君に代わってもらったらしいよ」

「ふーん。でもちようどいいんじゃない？ 葵はあんまり目立つの好きじゃなさそうだし」

「なんかお兄ちゃんも『アオイは縁の下が大好き』って言った。でもそれなら、はじめからじゃんけんする必要無いのにな」

変なの、そう言ってふんわりと朱里は笑った。

昼休みになると、女子たちはグループになつておしゃべりを始める。昔はこの雰囲気がなく苦手だったが、とげとげしいのは一部だけで、別に全てのグループが仲間を縛り付けておくためだけのものではないということを知ってからは、前ほどこの時間も苦痛

ではない。

それに、朱里といるのは好きだった。朱里は勉強も運動も兄ほど得意ではなく、なんだか要領が悪いというか、とにかく危なっかしい子だった。そんな彼女に苛立ったりする人も中にはいたが、私は彼女を好きだったし、尊敬もしていた。

朱里はいつも一生懸命で人のことばかり考えているが、自分の本心を決して見失わない。彼女はいつも『繭子ちゃんは凄いなあ』と言うが、本当は彼女の方がずっと凄いのだ。

「コンクールですか？」

放課後、いつも通り美術室に赴いた私に先生はそうそう、と赤い爪を揺らした。

「今年、初めて行われるコンクールがあつてね、それが1校につき1作品までなのよ。お題は『私の憧れ』ですつて。ふふ、素敵なお題よねえ。うちの3年生つて、あなたと日野さんだけじゃない？後輩たちは、是非3年生に出してほしいつて。健気でしょう？」

先生は、ちよつと危ないビデオに出てきそうなほどこてこての女教師で、うちのクラスの男子は美術授業の度に浮足立っている。それを見た女子たちが『男子つて本当に不潔よねー、倉田さんもそう思わない？』と私に話を振ってきたけれど、なんて答えたらいいのかわからないので笑つてごまかしておいた。

けれど、恋の相談にもものつてくれる美人な先生は女子からも結構好かれていて、美術準備室は時に、恋のお悩み相談室として開放されていたりもした。私は画材を取りに行く目的ぐらいでしか、そこへ行ったことはないが。

「日野さんと話してみてる？あなたたち2人なら、実力も申し分ないと思うわ。2人で描いて、それから決めてもいいし。まあ、もし決まったら教えて頂戴ね」

その日の放課後、朱里に話をすると、是非私に描いてほしいと言
いだした。

「私ね、繭子ちゃんの描く絵、すごくいいと思うんだ。力強くて、
繊細で」

「朱里、自分のこと下に見すぎだよ。朱里の描く絵、あたし好きだ
よ」

朱里はいつも、私のことを過大評価しすぎなのだ。私は彼女が思
っているほど、素晴らしい人間なんかじゃないのに。

「うづん、そうじゃないの。それがね、もし『幻想』とか、そんな
のだったら私も描いてみたいなって思うの。でもね、私は自分の憧
れって何か、正直言うとかわかんないの。それに私が得意なのは水彩
画で、ふわってした絵を描くのが好き。繭子ちゃんが描きたくない
なら無理にとは言わないけど、繭子ちゃんの大胆な油絵って、見て
て気持ちいいんだよね。繭子ちゃんは、描いてみたいって思うもの
無いの？」

予想だにしなかった答えが返ってきて、私は正直驚いた。彼女の
こういう、自分の思っていることをそのまま伝えるところ、そこに
そ私が朱里を尊敬している理由の1つだった。

『繭子ちゃんは、描いてみたいって思うもの無いの？』

私は考えてみた。たくさんの木々、茂る緑、青く高い空。ある寂
れた公園が、私の脳裏に浮かんだ。

「朱里、あたし描いてみるよ。描きたいもの、あるの」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9653x/>

彼と彼女の思惑

2011年10月29日09時10分発行